

日韓プログラム・通年予備教育カリキュラムのための 第2回教育参画実践について

太田 亨・門倉 正美・菊池 和徳・藤田 清士・古城 紀雄¹⁾

要 旨

本稿は、日韓プログラムの枠組みにおける「教育参画」第2回目（2009年8月18～20日、於：慶熙大学校国際教育院）の実践報告である。

第2回教育参画の教育対象は日韓プログラム第10期生98名である。第1回目との大きな違いは、1) 授業科目として、第1回目の日本語と数学に加え物理も実施したこと、2) 日本へ渡航するに当たって、プログラムの意義と日本での留学生活全般に関する講義を行ったこと、3) 教育参画終了時にアンケート調査と学生との懇談会を設けたこと、の3点である。

第2回目は第1回目の経験を踏まえ、学生のレベル差を事前に念頭に入れた授業設計がなされた。その結果、教員と受講学生の双方から、「数ヵ月後に渡航を控えた学生たちにとって日本での〈後半期予備教育〉の授業を具体的にイメージする助けとなつた」と、積極的な評価を得られた。しかしその一方で、「期間が短すぎる」というアンケート結果も出ており、参加した教員の中からは更に、「教科によっては8月でない時期の実施を望む」という意見も挙がった。また、前半期予備教育の授業担当教員との事前の打合せが不足していた点も複数の参加教員から挙げられ、今後の教育参画を実施する上で更なる課題として残された。

I. 日韓プログラム第10期生対象の第2回教育参画全体概要

本稿では、太田他（参考文献②）で報告した、日韓共同理工系学部留学生事業（日韓プログラム）の枠組みにおける、韓国内（前半期）予備教育²⁾（以下、「前半期予備

1) 太田亨（金沢大学留学生センター）、門倉正美（横浜国立大学留学生センター）、菊池和徳（大阪大学大学院理学研究科）、藤田清士（大阪大学大学院工学研究科）、古城紀雄（大阪大学免疫学フロンティア研究センター）

教育」と略す)への教育参画・第2回目の実践報告を行う。

第2回目の教育参画は2008年の第1回目同様、慶熙大学校国際教育院において行われた。教育参画を行うにあたっての基本的な方針や教育目標については太田他(参考文献①)に述べたとおりであるが、2009年度は日本語、数学のほかに物理の授業を加え、更に日本留学に当たって日韓プログラムそのものの意義や留学に対する心構えを説いた特別講義もあわせて実施した。

表1は第2回目の教育参画のスケジュールであるが、灰色の部分が筆者らの担当した授業/講義部分である。

表1 第2回教育参画・時間割

	班/教室	2009.8.18(火)	2009.8.19(水)	2009.8.20(木)
1時間目 (9:00~10:20)	1 (101)	作文(韓国語)	漢字・語彙	
	3 (102)	作文(韓国語)	漢字・語彙	
	2 (201)	作文(韓国語)	物理(藤田)	
	4 (202)	作文(韓国語)	日本語I(門倉)	
2時間目 (10:30~11:50)	1 (101)	作文(韓国語)	日本語II(太田)	
	3 (102)	作文(韓国語)	物理(藤田)	
	2 (202)	作文(韓国語)	漢字・語彙	
	4 (202)	作文(韓国語)	漢字・語彙	
3時間目 (13:10~14:30)	1 (101)	日本語I(門倉)	数学(菊池)	聴解
	2 (201)	数学(菊池)	日本語II(太田)	日本語I(門倉)
	3 (102)	日本語II(太田)	日本語I(門倉)	数学(菊池)
	4 (202)	物理(藤田)	聴解	日本語II(太田)
4時間目 (14:40~16:00)	1 (101)	物理(藤田)	特別講義(古城)	学生との懇談会 (太田・門倉・菊池)
	2 (201)	聴解		
	3 (102)	聴解		
	4 (202)	数学(菊池)		

II. 第2回教育参画の教育内容

1. 太田担当授業「日本語II」

(1)授業の狙い

80分の授業を二分し、前半でa)の課題を、後半でb)の課題を与え、日本語を学習する過程で論理的な思考力を養成することを目指した。

2 前半期予備教育は例年3~8月まで行われるのに対し、それに統いて10月から翌年3月まで日本国内で行われる予備教育を「後半期予備教育」と呼ぶことにする。詳細については太田他(参考文献②、p.10)を参照のこと。

- a) 論旨が一貫した文の構造や文章の流れを読み解き、自分自身で構成できるようすること
また、なぜそのように直すのか、自身の文法ルールを内省し言葉で説明してみること
- b) グループでプレゼンテーションのアウトライン構成を考え発表できるようすること

(2) 使用教材

- a) 『理科系の作文技術』（木下是雄著、中公新書、1981）
- b) 金沢大学におけるこれまでの日韓プログラム生が実際に発表したテーマ集
また、『レポートの作り方』（江下雅之著、中公新書、2003）も参考にした。

(3) 授業内容

- 1) 文頭と文末の関係（足なし文）と文章の流れ（逆茂木型文章）の訂正、及び学生が自身の中に構築した文法を言語化し説明する作業

課題1：

私は、この点を考えると小林氏の提出したモデルは現象を単純化しすぎている。p.22

課題2：

ここで問題となるのは、前に述べたように、端子容量とケーブル容量が大きすぎると発振が停止したり、不安定になったりする。p.122

課題3：

安全な歩き方の指導は、歩道・路側帯などの歩車分離がある時の歩き方と、歩車分離がない時の歩き方との二通りの指導がある。p.124

課題4：

アルミニウム製鍊は電力多消費の代表のようなもので、別項に述べるように電力単価の切り下げ、別の新製鍊法の開発努力をしているが、電力の安価な地域へ出かけて製鍊することが計画されている。p.25

課題5：

次の金属のうち、その4.0gを希塩酸の中に入れたとき、金属が反応して完全に溶け、その際発生する気体の体積が、0°C、1atmで1600cm³になるものを選べ。（入試問題）

授業の流れ：

- ①. 一定の時間内に課題文の文法的な誤りや文意が分かりにくい部分を修正させる。
- ②. 何人かの学生を指名して、直した部分を朱書きで板書訂正させる。
- ③. 訂正した学生に、なぜそのように直したのかを発表させる。
- ④. 他の学生からコメントを受けつけ、教員もコメントし解答例を提示する。

2) プレゼンテーションのためのアウトライン作成演習

課題：以下に挙げるような具体的テーマの中から一つ選んで、「韓国の X」を紹介する20分間のプレゼンテーションを作成したい。まず、プレゼンテーションの内容のアウトラインを考えなさい。一般的の日本人が聞いても分かりやすくなるよう、説得力のあるアウトラインを目指すこと。

1. 「韓国のキムチ」
2. 「韓国のパンソリ」
3. 「韓国の伝統的な遊び～ユンノリ～」
4. 「韓国の映画」
5. 「韓国の伝統的な家～ハンオク～」
6. 「韓国人の気質・特徴」

授業の流れ：

- ①. 4～5名で1グループを作り、テーマを一つ選ぶ。
- ②. テーマに沿ってアウトラインを箇条書きする。その際、内容項目の配列についてグループ内で十分に合意がとれるようにする。
- ③. ホワイトボードに板書した後、盛り込む内容項目とその配列について意見を発表する。
- ④. 教員も含めクラス全員で発表されたアウトラインについてコメントする。

2. 門倉担当授業「日本語Ⅰ」

(1)授業の狙い

日本語の授業での聴解と読解は、教材がどうしても短いものを詳しく理解することに終始しやすい。この授業では、多聴と多読への志向を触発することを心がけた。

80分の授業を三つに分け、1) ミニレッスン(短い講義を聞き、要点をノートする)、2) 3千字の文章ができるだけ速く読み、下線等で要点を際立たせたうえで、自分の「問い合わせ」を書く、3) 出来のよくないメニューやメールを読み、どこがよくないかを考える、という3つのタスクを課した。

(2)使用教材

- a) 教材1：『よく分かる学びの技法』(田中共子編、ミネルヴァ書房、2003)
「大学で何を学ぶのか」(pp. 1-5)
- b) 教材2『日本語を書くトレーニング』(野田尚史・森口稔、ひつじ書房、2003)
トレーニング2「レストランのメニュー」(p.16)
トレーニング3「問い合わせのメール」(p.24)

(3)授業内容

- 1) ミニレッスン（多聴の演習）：15分ほど「多読・多聴のすすめ」について、ナチュラル・スピードよりはやや遅く、できるだけ簡明な表現で講義し、学習者はメモをとりながら聞き、教員が最も言いたいことを3点、ワークシートに箇条書きする。
 - 2) 多読・速読の演習：
 - ①. 教材1「大学で何を学ぶか」を10分間、速読する。学習者たちは、速読しながら重要な言葉を○で囲み、重要な文に下線をひく。
 - ②. どこまで読めたかを確認してから、学習者の多くが読めたところまでを大まかに説明する。
 - ③. 説明を聞いて、学習者は、学問的探究につながりそうな「小さな疑問」を少なくとも3つワークシートに箇条書きする。
 - 3) ペアワーク：
 - ①. 学習者は、ペアごとに座る。
 - ②. 教材2所収の出来のよくないメニューとメールを読み、どこがよくないかをペアで考え、気づいた点をワークシートに記入する。
 - ③. 気づきを順番に、各ペアで1つずつ発表させ、それを板書する。
 - ④. 気づきを分類することによって、メニューとメールといった文書を書くうえでの注意点を、より一般的なルールの形でとらえることを促し、学習者に発表させる。
- 上記の3つのタスク終了後、ワークシートを回収した。

3. 菊池担当授業「数学」

(1)授業の狙い

- a) 数学的な視覚化が日常的な問題にも実際に応用されていることを認識させること
- b) 行列、数列、数学的帰納法などを使うための技法とその意義を同時に理解させること
- c) 積分に関し計算の意味や計算を簡略化するアイデアが重要であることに気づかせること
- d) 微分の計算を工夫させると同時に、微分自体の意義や問題の意図を読み解かせること

(2) 使用教材

- a) 「川渡り問題」として有名な謎々のうち最も単純なタイプのもの（問題1）
- b) 金沢大学2008年度前期日程入学試験理系数学第1問（問題2）
- c) 「Buffon の針」として有名な問題に関するオリジナル PDF ファイル（問題3）
- d) 大阪大学2006年度日韓プログラム数学プレイスメントテスト第3問（問題4）

日韓プログラム 2009 教育参画@慶應大 数学問題（第1回）

1

日韓プログラム 2009 教育参画@慶應大 数学問題（第2回）

2

問題1. ある人が川岸でこちらの岸からあちらの岸まで1艘の小舟で渡ろうとしている。この人は1匹の狼と1匹のヤギを連れ1個の大きなキャベツを持っている。小舟は小さいので、この人の他には狼とヤギとキャベツのうち1つしか一緒に乗せられない。狼とヤギと同じ岸に残すと狼はヤギを食べてしまうし、ヤギとキャベツを同じ岸に残すとヤギはキャベツを食べてしまう。

(1) この人が狼もヤギもキャベツも損なうことなく、この小舟で向こう岸に無事に渡るには、どういう手順で川を渡ればよいか？

(2) (1)のように川を渡るには、少なくとも3往復半かかり、最短手順は丁度2通りある。このことを一目でよくわかるように図を使って説明せよ。

（“川渡り問題”として有名ななぞなぞ）

問題2. 自然数 n に対して、2次正方行列 A_n を

$$A_1 = \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}, \quad A_{n+1} = \begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 0 & 3 \end{pmatrix} A_n \quad (n \geq 1)$$

により定める。また、2次正方行列 B_n は

$$B_{n+1} = \begin{pmatrix} 2 & 1 \\ 0 & 3 \end{pmatrix} B_n - \begin{pmatrix} 1 & 3 \\ 2 & 4 \end{pmatrix} \quad (n \geq 1)$$

を満たすとする。次の問い合わせよ。

(1) 数学的帰納法を用いて

$$A_n = \begin{pmatrix} 2^{n-1} & 2^{n-1} + 3^{n-1} \\ 0 & 3^{n-1} \end{pmatrix} \quad (n \geq 1)$$

が成立立つことを示せ。

(2) ある 2 次正方行列 C に対して、 $C = B_n - A_n$ がすべての n について成立立つとする。このとき、 C を求めよ。

(3) (2) の条件を満たす B_n のうち、逆行列をもたないものは B_1 に限ることを示せ。

（金沢大学、2008 年度、前期理系第1問）

問題3. 平行線が間隔 2 で多数引かれた床に長さ 1 の針を投げるととき、針が平行線と交わる確率を求めよ。ただし、針はまっすぐで、密度は一様であり、針と平行線の太さは無視でき、平行線は十分長く十分多數であると仮定する。

ヒント：平行線と直交する方向への針の射影の長さについて平均を考えよ。

（“Buffon の針”として有名な問題）

(3) 授業内容

問題を事前に解いてもらった上で、代表者に答案を白板に書いてもらい、その答案をもとに白板やプロジェクターを使って分かりやすく解説した。

- 1) 可能な状態を点とし、点と点の関係を線分とし、線分と線分の関係を定義し、最終的に点と線分からなる大域的な地図を作成する、という数学的な視覚化の威力について解説した。
- 2) 数学的帰納法における論理の流れを示す言葉の使い方を丁寧に説明するとともに、数学的帰納法自体の必要性や行列にまとめて計算する意義について解説した。
- 3) 典型的な積分計算を説明した上で、元の問題を変形してできる問題族の中から

最も計算が楽になるものに注目するという、積分計算を簡略化するアイデアについて解説した。

- 4) 微分計算の工夫について答案を添削しながら具体的に説明するとともに、微分が1次近似であるという本質や問題が曲率円による2次近似であるという意図について解説した。

4. 藤田担当授業「物理」

(1)授業の狙い

物理の授業では、日本の基本的な授業スタイルに慣れてもらうことと、物理科目と大学の研究室のつながりを理解することに狙いを定めた。授業前半は板書による講義を行い、電磁気学の1単元を学習した。後半では、大学の研究室で物理がどのように研究に役に立っているかを、DVD映像を通して学習し、公式に対する理解を問うとともに、物理で使用する単位系の理解度などを尋ねるアンケート（図1）を実施した。

(2)使用教材

- a) 理解しやすい物理 I・II (文英堂)
- b) キャンパスライフ 工学部紹介ムービー DVD (大阪大学工学研究科編)

物理教育に関するアンケート用紙：

Q 1. 韓国と日本で物理の教え方には、大きく違うと思いますか？

- | | | | | |
|--------|--------|---------|--------|--------|
| 1. | 2. | 3. | 4. | 5. |
| 全然思わない | 余り思わない | どちらでもない | 少しそう思う | 強くそう思う |

Q 2. 韓国で物理を勉強している時に、物理は他の科目に比べて難しい科目だと思いますか？

- | | | | | |
|--------|--------|---------|--------|--------|
| 1. | 2. | 3. | 4. | 5. |
| 全然思わない | 余り思わない | どちらでもない | 少しそう思う | 強くそう思う |

Q 3. 日本の大学ではほとんど日本語で書かれた物理の教科書を使います。日本でも韓国の大學生のように英語の物理の教科書を使用したほうが良いと思いますか？

- | | | | | |
|--------|--------|---------|--------|--------|
| 1. | 2. | 3. | 4. | 5. |
| 全然思わない | 余り思わない | どちらでもない | 少しそう思う | 強くそう思う |

Q 4. 物体の速度は微分形で表記できることを知っていますか。（はい・いいえ）
知っている場合、速度vと距離xと時間tの関係を微分形で表記してください。

Q 5. 韓国での物理の予備教育は、韓国語と日本語のどちらで行うのが良いと思いますか。 (韓国語 ・ 日本語) なぜそう思いますか。その理由も書いてください。(韓国語で書いててもかまいせん)。			
Q 6. カタカナで書いた次の単位等を記号で書いてください。例：メートル (m) キログラム () アンペア () パスカル () ワット () ニュートン () ジュール () ケルビン () ポルト () モル () カンデラ () ギガ () メガ () ミリ () マイクロ () ナノ () オーム ()			
Q 7. あなたの入学予定学科を書いてください。(科) その学科の専門と物理学とは、どのような関係にあると思いますか。思い付くことをできるだけたくさん書いてください。(韓国語で書いててもかまいせん)。			
Q 8. 日本で物理の予備教育を受けるさいに不安なことを自由に書いてください。 (韓国語で書いててもかまいせん)			

図1 物理教育に関するアンケート

(1)授業内容

導入では電磁気学を取り上げ、日本の高校から大学へ進学する際にどのような学びの相違があるかを解説した。次に電磁気学の学習項目を概説し、電気容量とコンデンサーの単元を用いてミニ講義を行った。具体的には、電気部品として利用されているコンデンサーの物理メカニズムが自然界にも存在することやその原理が広範囲に応用できることを学習した。

授業後半では、大学の実験室の様子を紹介したDVD映像を見せ、研究にいかに物理が必要であるかを考えてもらった。DVDでは、機械工学や電気電子情報分野での最先端の研究が紹介されており、大学の研究現場の実際を見ることも意図した。残りの時間はアンケートに回答する時間とした。アンケートでは試験問題のような形式を取らず、日本語で記載された単位を正確に理解し、単位記号で記述できるかの問い合わせを設定した。授業中には、物理という科目のイメージを問うアンケートも口頭にて行った。

5. 古城担当特別講義「もうすぐ日本へ留学するみなさんへ」

(1)講義の狙い

高校を卒業して間もない段階で母国を離れる留学生にとっての不安・懸念は計り知れないと容易に推察できる。本講義では最大のポイントを、その不安・懸念を想定した上でそれらを払拭・打破する指針を与えることに置いた。加えて、担当者が長年こ

のプログラムに主体的に関わる中で、「日本・韓国両国民からの支援と期待」を強く意識しない学生が散見されたところから、今期学生には来日前から高度にその自覚を形成することも講義の目的とした。

(2)講義内容

全員を一堂に着席させての講義形式の講義となつたが、以下に示す内容のパワーポイント(図2)を用い、高頻度に質問するスタイルで可能な限りインタラクティブに進めた。今回のように8月に本講義を聴講させる場合は、かなり日本語学習も進んでいるとの共通認識から、特に通訳者を介していない。授業内容的には(1)で述べた2点を中心に設定した。

韓日共同理工系学部留学生事業

予備教育第10期生対象講義「もうすぐ日本へ留学するみなさんへ」

2009年8月19日(水) 於：慶熙大学校国際教育院

大阪大学名誉教授・元大阪大学日韓共同理工系学部留学生受入方法検討ワーキング

古城 紀雄

1. 韓日共同理工系学部留学生事業

韓日共同

- ・ふたつの国の政府が協力して奨学金を用意
- ・2国共同奨学事業は世界中でこのプログラムのみ

両国の国民の税金を投入

選ばれたみなさんへの両国民の期待が大きい

2. 留学するということ

(2.1) 自律的留学生活

○「外国で長い間一人で暮らす」ことが始まる

⇒全てを自分が決める。

奨学金の収入に見合った支出の管理

すぐに親や先輩に甘えて借錢しない。

この苦労も、自分や国家の将来のため

○ 適切な気分転換と精神的な安定の維持

⇒勉学にも人間関係にも、全ての社会生活に重要。

○ 誰でもホームシックにかかる！

⇒長期の留学では誰でも経験

だからと言って、失望したり目的を見失つたりしない

問題が生じた場合には、

・先輩や大学内の友人を通じて、支援を求める

・留学生センターや学部留学生相談室、地域の国際交流情報を収集し、すぐアクセス

(2.2) 大人としての義務

○ 時間の管理はきわめて重要！

(遅刻・欠席は厳禁、生活リズムの確立、時間厳守と約束履行)

3. 大学での履修（4年間で優秀な成績で卒業するために）

- ・留学生活と将来の大きな影響を与える
キーワード：「4年間で」・「優秀な成績」
- ・教養科目（共通教育科目）と専門科目の両方とも履修すべし

(3.1) 計画的な履修と単位取得

- シラバスを熟読し、自分の専門学部で指定された授業を優先的に着実に受講する履修計画
- 「優」への過剰な信仰は留年にもつながる
=「優」でなければ単位は不要という考え方は危険！（挽回をする努力を続ける）

(3.2) 教養教育での文系科目への対応

- みなさんの専門分野は理工系だが、
教養教育関係の科目も履修しなければならない。
(特に最初の1年半の期間に多い)

履修=授業に出席して試験に合格して単位を得る

社会や文化、歴史、言語、体育など、種々の分野の様々な概念と用語も学習しなければならない

(3.3) 数学関係科目および英語

- 数学の問題を解くということ（論理的記述による試験の解答）
1年の予備教育期間で確実に習得しなければならない
(単位が取得できなければ留年の可能性があり留年すれば奨学金などにも影響)
- 英語科目では「英文和訳」「和文英訳」が重要
みなさんにとっては外国語である日本語と英語の両方を使えるようになることが重要
(大変だが、できるようになる)
専門課程や大学院では、英語文献の読み解きの結果を基に日本語で議論する場合有り

4. 効果的な予備教育のために

- 日本語学習の重要性（日本語習得では韓国からの留学生は有利）
日本語は社会、文化の理解のみならず、日常の人間関係や大学での学習研究活動に重要。日本語能力が高ければ、得られる情報の量が格段に多くなる
- 韓国での予備教育で努力した学生は日本留学で十分に報われる。授業での理解力・学習速度も上がる
- 漢字習得は極めて重要
地道な努力を（まず、多くの漢字を覚えること）
特に「訓読み（くんよみ）」を強化すべし
専門教科科目での学習のポイント
- 数学・専門用語、数式および日本語表現の全てを十分に習得
・論述式解答の訓練
- 物理、化学、生物
・高校までにみんなが学習した内容で大丈夫
・教科書にある専門知識・内容を日本語で理解し表現できることが重要
- 英語・和文英訳を中心に学習時間がかかるが、根気強く

5. 日本人学生や地域の日本人との交流の重要性

- お互いを十分に理解し合うという基本的な考え方を身につける
- 将来的には両国にとって重要な役割を期待

- ・地域の交流会や小中学校訪問と交流 (国際理解教育)
- ・韓国の紹介の機会も多い
- ・韓国の文化や言葉を学びたがっている
- ・お互い誇りをもって相互交流してゆく日本人が多い。
- ・ホストファミリー制度も活用

6. その他

- 理工系は一般に大学院修士課程（博士前期）への進学率が高い
 - ・日本が誇る理工系教育は3年間
 - ・4年生の（学士）卒業研究と修士論文研究の期間
- 大学院では私費留学生となる。
 - 優秀な成績で学部卒業後、優秀な成績で大学院入試に合格すれば、大学によっては大学院でも奨学金受給の可能性はゼロではない。
(今から奨学金を有効利用して貯金も)
- 多様な文化や社会を冷静に認めよう
 - すぐにステレオタイプに結びつけない。
- 不明な点は遠慮なく種々のコミュニケーションのチャンネルを使って正確な理解、解決へ

7. 最後に一言

ふたつの国の政府が大きな予算を使い、ふたつの国の関係者が協力し心を遣って、このプログラムのために懸命に努力している理由はなにか？ 何故だと思いますか？

その訳はこうです！

「世界の工業の発展を支える基礎的技術や先端材料製造技術の開発をもたらした日本の工学教育(特に4年次、修士1年と2年の3年間)を日本の若者とともに体験し、みなさんひとりひとりが、世界に飛躍する技術者・研究者になってほしいから。」なのです！

みなさんにはそんな期待に応える義務があります。

楽しみながら勉学に励み10月に、元気いっぱい、来日して下さい。待っていますよ！

図2 使用スライド

III. 第2回教育参画に対する評価

1. 担当教員による自己評価

(1)太田担当授業

評価できる点：

- ✓ 予め学生のレベル差があることを念頭に置いて、課題の種類や量、提示順序を考慮した授業設計ができた。
- ✓ 学生に自身の持つ日本語文法を内省させ意識化させることができ、酒匂他（参考

文献③(p.76) が指摘する日韓両言語の統語的な相似点について注意を向けることができた。

- ✓ 小グループによるブレインストーミングを取り入れた演習形式の授業を行い、学生たちの積極的な参加を促すことができた。

改善を要する点：

- ◆ 1つの授業時間の中で2つの異なる課題をこなすのは無理があり、各課題をこなすための時間が十分確保できなかつた。
- ◆ 上記に関連し、同一クラスに対して教育参画期間中の複数の日にまたがつて2回以上の授業時間がほしかつた。

(2)門倉担当授業

評価できる点：

- ✓ 1) 日本語母語話者による講義に短時間であつても接すること、2) 「速読・多読」が必要であることに気づくこと、3) 「書かれたもの」は必ずしもすべて優れているわけではないことといった、日本で学ぶうえで心得ておいてほしいことは、ある程度伝えられた。
- ✓ 「ワークシート」を書いてもらうことによって、一人ひとりの学習者の理解のようすが把握できた。
- ✓ ミニレッスンおよび教材1の内容自体を通じて、「大学での学びの特徴」について、メッセージが発信できた。

改善を要する点：

- ◆ 教材1を速読するという課題は、多くの学習者にとって実力よりも高度な要求であり、「ショック療法」的な側面があつた。よい意味での「ショック」にならず、クラスでの学習意欲がそがれた学習者も一部あつたようだ。
- ◆ 慶熙大での予備教育で、読み解きと聴解として、それまでどの教材をどのように学んできたかという学習者の学習履歴について、慶熙大の担当教員側と事前によく話し合う場を持ちたかったが、時間の都合上、それができなかつたのは残念である。

(3)菊池担当授業

評価できる点：

- ✓ 班ごとに設定した授業の狙いは概ね達成できたのではないかと思う。

改善を要する点：

- ◆ 全員を対象にした事前の導入的授業と事後の総括的情報交換の場があればなお良

かった。

- ◆ 記述式答案の表現集を事前に作成し配付しておいた方がよかつたかと思う。

(4) 藤田担当授業

物理の教育参画は今年度はじめて開始したため、学生の日本語力レベルの予想がつきにくかった。しかしながら、ほとんどの学生がゆっくりした日本語であれば授業内容を理解することができたので、問題なく授業を進行することができた。ごく一部に日本語での物理の理解が困難な学生が存在したため、それらの学生のための教材を持参していなかつた点が反省される。

評価できる点：

- ✓ レベルによりクラスが編成されていたため、クラスごとに学習内容を変えることができた。
- ✓ 講義だけではなく、映像を用いて研究内容の紹介や日本の大学を紹介することができた。
- ✓ 学生の物理に対するイメージを理解することができた。

改善を要する点：

- ◆ 物理の演習問題を解かせるには十分な時間がなかった。
- ◆ 授業中に物理という科目のイメージを学生に質問したりしたが、一部の学生を除き、積極的に発言する学生が少ない点が気にかかつた。

(5) 古城担当講義

先に示した資料（図2）の1から6までの大項目を小一時間で網羅した関係で、若干各項目での深まりに欠けた可能性がある。およそこの内容での講義は3度目であり、期待されている内容や展開についてある程度ニーズを把握はしているが、他の講義との共通的な問題として、この日本からの教員による授業の参加者が100%とはほど遠い結果であったことを課題と考える。これは慶熙大における予備教育システムの問題とも考えられるが、次回以降の課題である。また、日本語学習の進展とも関連するが、本講義の場合、科目に関する講義と若干異なり、時期的により早い段階で実施することを考えたい。

2. 受講した学生による評価（アンケート及び意見交換会）

第1回目の教育参画においては、実施直後に前半期予備教育を担当する教員との意見交換を行ったが、教育を受けた学生からの意見やコメントを収集する時間的な余裕

思う。

- 時期的には数学予備教育が始まる直前に、動機付けを行った方がよかつたかもしない。
- できれば、韓国側の数学予備教育担当者と事前に授業について情報交換を行いたかった。

3. 藤田コメント

授業中のアンケートや学生に直接尋ねた意見から、予備教育前半では日本語教育を重点的に受けるものの、物理や数学などの科目は韓国語での授業となるため、日本での予備教育後半ではいきなり日本語で理系科目を学習することには少し不安があることが分かった。また、物理で用いる数式には不安はないが、日本語で表記された単位系や物理用語には抵抗があることも分かった。その対策として、韓国での予備教育前半においても部分的に日本語を用いた理系科目の学習などが実施されるべきであることも認識された。

参考文献

- ①太田亨・門倉正美・安龍洙・酒匂康裕 (2008) 「大学入学前予備教育における日韓連携カリキュラムの試み～日韓プログラムの歩みから～」, 『日本語教育学世界大会2008予稿集1』, 釜山外国語大学校, pp.210-213
- ②太田亨・門倉正美・菊池和徳 (2009) 「日韓プログラム「通年予備教育カリキュラム」のための前半期予備教育シラバス試案検証へ向けた「教育実践」について」, 『金沢大学留学生センター紀要』, 第12号, pp.9-23
- ③酒匂康裕・安龍洙・金重燮・趙顯龍 (2009) 「韓国人学習者の日本留学に対するレディネス及びニーズの分析-日韓共同理工系学部留学生事業第9期生を中心として-」, 『近畿大学語学教育部紀要』, 第9巻・第1号, pp.65-88

付記 本報告は「日韓プログラムのシームレスな通年予備教育カリキュラムの開発研究」(平成19-21年度科学研究費補助金・基盤研究(B), 課題番号: 19320076, 研究代表者: 太田亨)による成果報告の一部である。

The 2nd Participatory Education Program for the *Seamless One Year* Preliminary Education of the Japan-Korea Joint Scholarship Program

Akira OTA, Masami KADOKURA, Kazunori KIKUCHI,
Kiyoshi FUJITA, Norio FURUSHIRO

Abstract

This article is the 2nd practical education report for the 98 students of the 10th generation of the Japan-Korea Joint Scholarship (JKS) Program, in which we, the five authors, participated at the Institute of International Education of Kyung Hee University (Seoul) from August 18 to 20, 2009.

There are three major differences between the 1st (2008) and the 2nd (2009) education programs; (1) we added a Physics subject besides Japanese and Mathematics, (2) we gave a lecture focused on the main purpose of the JKS Program and the brief guidance of the campus life in Japan, and (3) we applied an evaluation questionnaire to the students and had a free talking meeting with them.

The 2nd program was designed considering Japanese proficiency level gap among the students so carefully that we obtained very positive comments, such as "It helped us (students) to image about the Second Semester of Preliminary Education in Japan". However, according to the result of the questionnaire, the duration was so short for both the lecturers and the students. In addition, some lecturers considered that it would be more effective for some of the subjects on an earlier stage of the First Semester, and others pointed out that Korean and Japanese teaching staffs should have prior consultations before starting the program.

We recognize that all of the problems, as shown before, should be improved for the next and future programs.